

福井県における英語教育の強み

— 県外派遣教員から見た福井県の英語教育 —

福井県教育総合研究所

教科研究センター 小中学校教科研究課

木村哲彦

I はじめに

福井県が実施している「県外派遣教員研修制度」を活用して、平成31年4月に福井県教育総合研究所に英語科の指導主事として赴任し、この一年県内の数多くの学校を訪問してきた。

福井県の小学校では、「英語を使用して互いの考えや気持ちを伝え合う活動」を中心とした外国語教育が進められてきていることや、外国語教育のリーダーとして活躍している若手教員が多くいることがわかった。

中学校では、英語教育において長年、福井大学の山下邦幸名誉教授による「意見、考え重視の英語授業」に取り組んでおり、県の英語研究大会では一貫して同じ研究目標を掲げるなど、英語教員の授業改善への熱意は他県と比べて高いと感じる。

このような英語教育を支える要因は何か、探ってみた。

〈キーワード〉 県外派遣、外国語活動、外国語科、授業づくり、ALT

II 県外派遣教員の気づき

県外派遣教員として携わった福井県の英語教育施策は次のとおりである。

- 小学校外国語活動・外国語科の先行実施
- 英語力向上事業
- 教科別研修講座
- 指導主事訪問による協議や校内研修
- 全国学力・学習状況調査分析から授業づくりを提案する訪問研修
- SASA（福井県学力調査）作成および結果分析
- 習熟度別指導
- ALTの活用
- 県英語研究会の組織体制や問題作成
- 英語教育地域人材バンク制度
- 中学3年への英検対策講座や英検受検の助成
- 県独自の教材や冊子の作成
 - ・ 小学校外国語活動・外国語科の全210時間分の県教育委員会が作成した「先行実施期間における学習指導例」「We Can! 1,2, Let's Try! 1,2」、の指導案集（以下、県指導案）を各校に配付
 - ・ 中学校英語教材 OPINION
 - ・ 英語の絵本活用リスト
 - ・ 「コーパス」を活用した中学生のための英語表現集

また、地域別でも独自のテストや教材などを作成し、地域レベルの取組み支援が充実している。

各学校ではこれらの施策を基に、授業を3学年受け持つ、「タテ持ち」で教科間の協力、系統的な指導を行う。その上で、熱心で向上心のある教師たちが、地道に教材研究に励んでいる。さらに基礎基本の習得を徹底的かつ計画的に行っている。小・中学校の校種間による人事交流も頻繁なため、より丁寧な指導や小中連携による児童・生徒の理解がしやすい状況が生まれている。

この中で特に福井県の「強み」と感じたものは「多様な研修」であり、そして各学校に配属されている「ALT (Assistant Language Teacher) の活用」である。その内容について紹介したい。

1 研修

(1) 研修機会の多様さ

① 英語力向上事業

福井県では平成30年度から英語力向上事業が行われており、県内7ブロックの小・中学校から研究協力校（中学校8校、小学校15校）を指定し、事前検討会、公開授業と研究協議会が行われている。事前検討会では県教育委員会指導主事の指導の基、授業参観と公開授業に向けた指導案検討会、協力校全教員の校内研修、プレ授業、事前検討会を実施している。協議では、否定的な意見はなく、建設的な議論の基、教員全員が一丸となり授業を作り上げる意識が強い。

② 市町指導主事訪問

各市町で行われている指導主事訪問は年2回程度あり、指導力向上に向けた取組みが充実している。印象的なのは、市内全小中学校の教員に授業を公開し、互いに授業を参観できる仕組みになっていることである。そのため参観者が多く、同じ教材であっても、各校の展開や活動例の違いを見比べられる。これによって、より深く授業について振り返りができ、多くの教員の指導力向上につながっている。

③ 中高授業改善交流会

中高授業改善交流会では、中学校・高校の教員がその地域の互いの校種で行われている授業をそれぞれ参観し、一緒に協議する機会がある。中高の校種を越えた授業を互いに参観することで、系統的な学びの重要性や教科における専門性を高められている。

①～③のように、県レベル、市町レベル、中高連携といった様々な研修の機会がある。これは教員同士が互いに授業を見せ合う機会を多く作り出し、指導力向上のきっかけとなっている。

特に、小中高の教員が互いに授業を見て、児童生徒の英語力を把握することができるメリットは大きい。今後、現小学校4年生が中学校に入学するまでの3年間、小学校で受ける英語教育のカリキュラムは現小学校5年生および6年生と異なることになる。しかし、小中の連携が密である福井県では、スムーズな小中接続になることであろう。

福井県の教育文化における組織力が指導力を高め、校内研修によって、さらに教員同士が切磋琢磨し合っている状況が伺える。

(2) 訪問研修（小学校外国語活動・外国語科の授業づくり）による支援

① 訪問研修の概要

福井県教育総合研究所では、各学校の要請を受けて、校内研修の場で「外国語活動・外国語科の授業づくり」について提案している。

今年度、小学校、あわら市や勝山市教育委員会、坂井市英語部会等の14ヵ所からの要請を受けて、訪問研修を実施した。授業の展開例を私自身も実演しながら説明した。学校側はこの研修を基に、学校全体で小学校外国語活動・外国語科の授業づくりについて実践を重ねていく。

② 訪問研修の流れ

研修内容は基本的には学校ごとにほぼ同じであるが、活用例を各学校等の要望に応じて工夫している。福井市文殊小学校（図1）や森田小学校（図2）などで実施した研修内容を取り上げる。



図1



図2

まず始めに、小学校外国語活動・外国語科の授業を担当がT1で、ALTがT2で行う意義（図3）や言語活動とは何か（図4）を考えさせ、言語活動中心の展開例（図5）や言語活動の表現（図6）の紹介、スモールトークの確認（図7）、そして実際に文部科学省が作成した小学校外国語教材「We Can! 1,2」「Let's Try! 1,2」を使っでの展開例の紹介をする。その際、県独自で作成されている「県指導案」を参考にし、各小学校の要望に合わせた活用例を研究所員がデモンストレーションを行い提示する。さらに、新学習指導要領における「書く」「話す」活動の留意点や絵本の読み聞かせの活用例（図8）を紹介する。このような流れで、モデル授業の展開例を授業形式で説明し、教師には授業を体験しながら理解してもらう。

1-① 言語活動について

担任がT1として授業を行った方がよい理由

- 児童の性格や能力、家庭環境等に配慮した指導ができる
- 他の教科と関連づけ、児童の知的好奇心や興味関心を高められる

外国語活動・外国語科の授業で担任がT1に適している！

図3

1-① 言語活動について

「言語活動」って？

「言語活動」＝「実際に英語を用いて互いの考えや気持ちを伝え合う活動」

- 児童が興味・関心のある話題や日常生活や身近な事柄(人)についてやり取りする
- 伝え合う内容重視

「練習活動」≠「言語活動」

(例) ・チャンツ、歌、発音練習
 ・表現のための準備、練習
 ・英語の文字を機械的に書く練習
 ・児童を飽きさせないためのゲームやクイズ

図4

1-① 言語活動を中心とした授業

言語活動中心の展開例

- あいさつ
- 中学年: Warm-Up 高学年: Small Talk
- 本時のメインの活動
 - T-Tでたっぷり聞かせて児童にインプット
 - 話すことによる表現のアウトプット、(高)書くことによるアウトプットも
 - ※T-S→S→S→シェアリングの後、もう一度ペアを替えてS-S
- ふり返り 授業のめあて・学んだことをふり返らせる
- あいさつ

図5

1-① 言語活動について

対話を続けるための基本的な表現

- 対話の始めのあいさつ
Hello. How are you?
- 繰り返し
A: I want to go to Italy.
B: Oh, you want to go to Italy.
一言感想
That's good/nice/great! Super!
Really?
That sounds good.
確かめ
Pardon? One more time, please.

図6

1-① 言語活動について

言語活動中心の授業
Small Talkの基本的な流れ

- ① やってみせる
T-Tインタラクション
(担任だけの準備は、児童に話す。)
- ② 巻き込む
T-Sインタラクション
- ③ やってみる
S-Sインタラクション
- ④ シェアリング

T-Tのやり取りを聞き、視覚資料やジェスチャーなどの手がかりをもとに内容を推測していく。

当事者感をもって聞きながら、やり取りのイメージをもつことで、不安が減り活動意欲が向上する。

実際のコミュニケーションの場。伝えることができずうまく言うことができない表現に気付く。

言えなかった表現を全体で共有し、どのように言えば良いかをみんなで考え、表現をインプットする。

図7

2-④ 英語絵本の活用について

英語絵本の活用について

書名	著者	訳者	発行	単価	冊数	備考	冊数	単価	備考
Goodnight Moon	Margaret Wise Brown	橋本みゆみ	2004	148	5	2014年度に導入された。2015年度に追加購入された。2016年度に追加購入された。	20	7.4	2016年度に追加購入された。
The Very Hungry Caterpillar	Eric Carle	橋本みゆみ	2004	148	5	2014年度に導入された。2015年度に追加購入された。2016年度に追加購入された。	20	7.4	2016年度に追加購入された。
Dear Zoo	Rod Campbell	橋本みゆみ	2004	148	5	2014年度に導入された。2015年度に追加購入された。2016年度に追加購入された。	20	7.4	2016年度に追加購入された。
Where's Spot?	John J. Mee	橋本みゆみ	2004	148	5	2014年度に導入された。2015年度に追加購入された。2016年度に追加購入された。	20	7.4	2016年度に追加購入された。
Goodnight, Goodnight, Goodnight to You	Christy Farnsworth	橋本みゆみ	2004	148	5	2014年度に導入された。2015年度に追加購入された。2016年度に追加購入された。	20	7.4	2016年度に追加購入された。
Dear Mr. Tomkins	John Burningham	橋本みゆみ	2004	148	5	2014年度に導入された。2015年度に追加購入された。2016年度に追加購入された。	20	7.4	2016年度に追加購入された。
Dear Mr. Geronimo	John Burningham	橋本みゆみ	2004	148	5	2014年度に導入された。2015年度に追加購入された。2016年度に追加購入された。	20	7.4	2016年度に追加購入された。
Dear Mr. Geronimo	John Burningham	橋本みゆみ	2004	148	5	2014年度に導入された。2015年度に追加購入された。2016年度に追加購入された。	20	7.4	2016年度に追加購入された。
Dear Mr. Geronimo	John Burningham	橋本みゆみ	2004	148	5	2014年度に導入された。2015年度に追加購入された。2016年度に追加購入された。	20	7.4	2016年度に追加購入された。

図8

③ 受講生の状況

受講後アンケート調査の教員の振り返りに次のようなものがあった。

- スモールトークだけでなく、クラス全員をしっかり巻き込んで活動を考えていくことが大事だとよく分かった。児童が適当に答えるのではなく、理由も考え答えられるような、活動のねらいをもたせたい。
- これまで歌やチャンツをすることが多かったが、今日の研修を受けて、言語活動をもっと意識して取り組みたい。絵本も取り入れて授業を組み立てたい。
- スモールトークのTT・TS・SS・S・S-Sという流れで、子供たちの思いや考えが自分の言葉で伝わる授業づくりを他の先生方と共に進めていきたい。
- 子供たちの言葉から引き出す、子どもたちの分かる言葉で共有することはとても大切なことだと思った。

- 言語活動は「自分の考えや気持ちを伝え合う活動」というのは大事だとわかった。チャンツや発音練習をした後はペアで互いに伝え合わせたい。
- 本校にも絵本があるがあまり活用されていないので、積極的に使用していきたい。
- 子供とのやりとりが大切だと理解した。福井県版の指導案どおり、スモールトーク をしていたが、子供たちが知らないこと(福井の有名なスイーツや観光名所など)が多く、うまく成り立たないこともあった。子供たちの知識がないとできない内容もあり、難しいと感じている。
- 言えない表現を言えそうな表現に言い換えることが難しいと感じている。
- スモールトークや、やり取りをしながらの展開では、児童の活動、言語活動や練習活動の時間が確保できるのか不安であるが、ゆっくり丁寧に話していく必要性を強く感じた。
- テキストは中学校の英語の教科書より難しいように感じ、驚いた。高学年になると児童たちは授業についていけるのだろうか。

T-T： 教師同士のインタラクション

T-S： 教師と児童・生徒とのインタラクション

S-S： 児童・生徒同士のインタラクション

S： シェアリング

研修に対する満足度は、4ポイント満点中3.7ポイント、研修内容を活用する可能性についての質問は、4ポイント中3.6ポイントと高かった。振り返りからスモールトークや、やり取りの具体的な方法がより明確になり、効果的な訪問研修になったと考えられる。教師たちは児童たちを巻き込み、既習表現を使わせながら、児童たちがイメージしやすい語彙を用いて説明していく方法を身に付けたようだ。さらに絵本の活用方法も知ることができ、実際絵本を使った授業に取り組んでいる教師もいるようである。また、小学校の教員にとって、小学校外国語活動・外国語科の授業づくりの不安が少し解消され、授業づくりの方向性が理解できたという感想が多かった。

一方で、児童の背景知識が不足しているのも、県指導案を活用しづらい場面もあることや、やり取りで展開する場合、その時間を確保することに不安があることもわかった。

④ 活用状況

教育総合研究所では、受講者のアンケート調査までを実施しているが、この研修がそれぞれの学校でどのように生かされているかを、知りたくて、独自調査を行った。

調査対象校：自分が研修を行った学校 7校

調査時期：1月下旬（研修の約5ヶ月後）

調査方法：研究主任や英語科主任への聞き取り

【結果】

1 研修内容を学校全体で共有できていますか。

- 伝達講習を行ったが、外国語の授業を担当する教員しか研修内容を生かされていないので、不安に思う教員もいる。
- 職員会議で随時資料を配付し、新教材などの使い方について情報を共有した。
- 4年生担当なので、3年生の担当者と常に情報交換できている。しかし、高学年の授業を参観していないので、よく分からない。

- 2 授業を行う上で、新たな課題は何ですか。
 - 児童のもつ知識や経験から推測させ、HRT（学級担任）が既習表現につなげるやり取りについて知りたい。
 - 言いたいことを言える語彙や表現をどう増やしていくか。児童だけでなく教員側の指導力の向上をどうするか。
 - めあて（ゴール）に誘導してしまい、子供たちの発想の自由さを奪ってしまう。子供の自由な発想から授業を広げていくことが難しい。
- 3 小・中の接続に関して、市町や貴校で取り組んでいることは何ですか。
 - 教員が小中連携で中学校1年の英語を参観している。
 - 学期に1回程度、中学校所属のALTと低学年の担任がTTで授業を行う。
 - 中学校のALTと中学校の英語科教員による出前授業がある。
- 4 どのようにALTを活用していますか。
 - デモンストレーションでのモデル役、やり取りの相手。
 - HRTや児童の知らない単語や文化の紹介。
 - T-T、T-S、T-Sのやり取り（ALTの素朴な質問から児童の新たな発見につなげる）
 - 放課後にチャレンジタイム（20分程度）がある。（インタビューゲームなど）
- 5 支援しなければならない児童にどう対応していますか。
 - 文で言えなくても、分かりやすい単語を並べさせる。言いにくい表現を日本語で推測させて、それをみんなで英語にしていく。
 - 無理はさせず、完璧を求めない。音とリズムで楽しませることを第一にしている。時間内にできなかったところを支援学級で補っている。
- 6 貴校の特徴的な英語に関する取組みは何ですか。
 - 小規模校で少人数のため、一人一人の児童の考えをクラス全体で推測させながら考え、一つの英語の形にしていく。
 - 朝の会が始まるまで、校内放送を利用して英語の歌（ビートルズなど）を聞かせている。
 - 玄関ホールにホワイトボードを設置し、ALTとイベントごとに行事に関する子どもの作品や結果を貼り出す。
 - 低学年に英語の絵本の読み聞かせを行っている。
 - 木・金曜日の朝の5分間、英語タイムで簡単なTV動画を見る時間を設定している。
 - 毎週、ランチタイムに英語の歌を流している。
 - 子どもたち主体でランチタイムや昼休みに、放送委員による英語の参加型クイズを実施している。
 - 廊下や階段に英語に関する掲示を行っている。

以上のように、事後調査を行うことにより、訪問研修後すぐに行われていた振り返りのアンケート調査だけでは分からなかった各校の現状や課題等を聞き出すことができた。

課題として注目すべき点は、「言いたいことを言える語彙や表現をどう増やしていくか、児童の英語力だけでなく教員側の指導力の向上をどうするか。」や「児童をめあて（ゴール）に誘導してしまい、発想の自由さを奪いがちになってしまった。児童の自由な発想から授業を展開していく上で、どのようにバランス良く進めて行けばよいのか難しい。」などであった。

あわら市のある小学校の授業を参観させていただいた。挨拶からスモールトークや、やり取りを踏まえた言語活動を中心に、ALTを児童たちの表現活動の発信相手になるように設定し進められていた。HRT（学級担任）とALTとのやり取りを十分児童たちに聞かせていた。そして、児童たちのつぶやきを拾いながら、T-Sで巻き込み、S-Sで分からない表現に気付かせ、クラス全体でシェアリング、ペアを換え再びS-S、という細やかな指導を見ることができた。これこそ福井県の外国語活動・外国語科のモデル授業になる良い例

であると言える。

また、小学校では新学習指導要領実施に備えて、ほとんどの学校で日常的な英語環境をつくっていた。目の届くところに英語があふれる環境をつくり、朝や昼休みに英語に触れあうことができるような工夫や仕掛けを意識して取り組んでいた。

英語専科の教員がいない学校で、「英語力向上事業において教員の指導力が向上する仕組みができていることから、経験の浅い英語担当教員が上手に授業を進めることができている」という校長の話も聞いた。福井県全体で英語教師を育成しようとする汎用性の高い研修体制が根付いていると言える。

2 ALTの活用

福井県では、中高各学校に一人専属のALTが配属されている。小学校には、それぞれ市町によってばらつきがあるが、中高と同様に配属されている学校も多い。

(1) ALT派遣の概要

福井県は、いち早くALT事業を導入し、今年で32年目となる。今年度、県では113名の英語ALTをJETプログラム（JETプログラム「語学指導等を行う外国青年招致事業」(The Japan Exchange and Teaching Program)）で任用しており、全中学校に75名のALTを配置している。中学校では、ALTとのTT（チーム・ティーチング）授業は、1・2年生で週1.5時間、3年生で週1時間以上実施されている。また放課後等の時間を活用し、ALTと生徒が1対1で会話する時間を設定しているところもある。ALTの地域行事への参加や地域住民との交流なども促進している。授業外においてもALTが英作文の課題などを添削したり、英語の掲示物を作成したりするなど、非常に積極的に生徒に関わっている。ALTによる授業公開および事後研究会や外国語指導助手の指導力等向上研修も実施され、TTはもちろん、授業外や学校外の活動にも一層活用が推進されている。

また、英語教育地域人材バンクという制度では、県内在住の英語を話せる人材の登録を進め、小中学校の外国語活動・外国語科、英語科の授業および英語関係の行事等の支援を担い、AET(Assistant English Teacher)や支援員として児童・生徒の英語力向上に活用されている。

ALT業務に関して、各学校にはTTの授業を行う際にALTの時間割を調整するのが、ALT業務担当者である。ALTの生活等の悩みを聞いたり、活用計画を作成したり、ALTとコミュニケーションを誰よりもとる相手でもある。

(2) ALTの研修

ALTの研修は、一般財団法人自治体国際化協会(CLAIR)と県教育委員会主催により、年3回実施されている。8月に新規ALT向けのTT（チーム・ティーチング）セミナー、11月にはSkill Development Conferenceとして福井大学の大学教授による講義やALT経験者によるTT等についての協議、3月にスプリングセミナーとして福井大学教授による講義と授業づくりセミナーを実施している。このような研修やALTの担当教員、県教育委員会 Prefectural Adviser（県庁ALT）の助言や支援によって、県内におけるALTの高い指導力が確保されている。

しかしながら、今年度より、教員の業務改善の一環として、11月に行われていたALTとJTE(Japanese Teacher of English)対象の研修において、JTEの参加が悉皆ではなくなった。そのため、ほとんどのJTEが参加しなくなったようだ。各学校のALT担当者がALTの悩みや授業づくりの課題について、ALTとJTEと共有する場としての合同研修が失われたのではないかと危惧される。今後、ALTのトラブルへの対応や、質の高いALTをどのように育成し、確保していくかが、福井県だけでなく全国的な課題であると考えられる。

(3) ALT と各校の現状

指導主事訪問や中高授業改善交流会の公開授業、NITS（独立行政法人教職員支援機構）と福井県教育委員会共催による『小学校における外国語教育指導者養成研修』の事前授業、県外からの視察公開授業などのTTの授業を見た中で、3名のALTに改めて授業参観と聞き取りを実施した。

名前	① A 先生	② B 先生	③ C 先生
所属 (市町)	あわら市	あわら市	勝山市
担当校	小学校4校	中学校1校	小学校4校
滞在期間	3年目	2年目	2年目
担当 クラス・ 時間	月から金曜日まで 4校を訪問する (拠点校はD小学校) 各学校で3・4・5・6年担当	月～金曜日まで 常駐 1・2年 週1.5時間 (2週間に3回) 3年 週1時間 週に1回 学期に1回 校区の小学校訪問	市内小学校9校を訪問 ただし午前と午後、前期と後期で訪問先を替える (ALTと支援員のペアで各校を訪問)
授業以外 の業務	放課後チャレンジタイム・インタビューゲーム、玄関ホールの英語掲示物コーナーづくりなど	英作文の添削、英検面接対策、掲示板、英会話 (スピーキングテスト)、国際交流事業ワークショップセミナー	常駐の所属先がないため、訪問校での学校行事に参加

① A 先生

D小学校を拠点として勤務されているA先生に聞き取り調査を行った。

A先生はJETプログラム派遣によるALTで、あわら市の小学校外国語活動・外国語科の授業づくりに大変貢献している。

例えば、言語活動重視の授業についてHRTと数多く打ち合わせをしている。D小学校とE小学校では県の英語力向上事業でHRTと一緒にTTの授業について事前検討会や研究授業を通して学んでいる。またF小学校では、NITS（独立行政法人教職員支援機構）と福井県教育委員会主催の「小学校における外国語教育指導者養成研修」の公開授業校として県教育委員会から指導助言を受け、授業づくりに励んでいた。このようにALTが様々な事業と関わりながら授業力のスキルを高め、HRTとのやり取りを重視した研究授業などに柔軟に取り組んでいる例は珍しい。

② B 先生

高等学校と中高連携で特別クラスもあるあわら市G中学校を訪問した。中規模校の中学校で勤務しているB先生の授業を参観した。英語科の教員5名と一日平均4時間の授業を担当し、TT授業を受け持っている。普段、基礎クラス、標準クラスに分かれ、習熟度別授業学習を行い、TTの授業はALTと合同で実施されている。既習事項を基に内容を膨らませ、コミュニケーション活動を重視し、学期末はその成果を評価するために、生徒一人一人に対しインタビューテストを行っている。「発表」と「やり取り」の2領域で話す力の評価を行っている。

普段の授業では、スピーチや既習表現を使った活動を中心にした授業を展開し、英会話活動としてALTから2問質問し、生徒から2問質問してやり取りを行う。またALTの出身地の文化に触れる機会を作ったり、英検の面接対策の練習、英作文の添削、授業時間でできなかった残りの発表などを昼休みに行ったり、英語の掲示板では季節に応じた英語掲示物を掲示するなど、精力的に取り組んでいる。

加えて、あわら市では市主催の国際交流事業が実施されており、毎年11月中旬にアメリカオレゴン州ユージン市(ユージン学園)に10日間、今年度中学生16名、高校生7名が参加したため、参加生徒向けワークショップの講師としてB先生が関わっている。

このように授業だけでなく、様々な業務も任され、やりがいを感じて活動している ALT もいる。また県教育委員会によって、ALT に対して細やかな支援も行われているため、ALT が非常に満足していることを聞くことができた。

③ C 先生

今回、6年担任の H 教諭と C 先生による TT の授業を参観することができた。H 教諭は普段の授業と言いながら、ALT と息の合ったやりとりをしながら、授業を展開していた。

児童同士の S-S インタラクションでは、習った表現を使って児童たちは1分間ずっと話し続けていた。やり取りの場面を見て感じたことは、児童が本当に言いたい表現を使おうとしている点であった。単なる練習活動でない既習表現を HRT と ALT が上手く引き出していた。

また、以前、5年生担当の I 教諭の公開授業を参観した際にも、TT 授業において C 先生は I 教諭と息の合った授業展開を行うことができていた。このように、C 先生は HRT との連携がスムーズであった。

その理由として、勝山市の英語支援員の存在が大きい。J 小学校の支援員である K 氏にもインタビューを行ったところ、支援員が HRT と ALT の間に入り、コミュニケーションを取り合い、双方へアドバイスをを行うことでスムーズに授業が展開できていることがわかってきた。

(4) ALT 活用の課題

すばらしい福井県の ALT 活用であるが、ALT 業務担当者とのコミュニケーション不足という課題があるのではないかと感じた。その理由としては

- ・まとまった時間がとれていない。
- ・ALT 自身が、どこまで相談して良いか悩んでいる。
- ・ALT 業務担当者が忙しい。
- ・小学校英語専科でない ALT 業務担当者で英語でコミュニケーションが取りづらい。
- ・文化的な価値観の違いから誤解が生じる。

が、あげられる。特に、ALT の中には日本語がある程度話せるが、児童・生徒との会話がどこまで日本語を制限しないとイケないのかなど、打ち明けていいものかどうか迷っている状況も見て取れた。

課題もある ALT 活用であるが、福井県の勝山市では、英語支援員が HRT と ALT の間で授業内容などを調整している例は、ALT だけでなく若手教員の育成にもつながり、推進していくべきモデルであると考えられる。

3 これからの取組みに向けて

小学校の外国語教育において、福井県では従来どおり、HRT が T1 として授業を主で担当している。しかしながら、文部科学省は英語専科教員を配置していく方針を示し、できる限り最も大切な入門期の英語教育の指導を専門性のある教員が担うようにしていこうと考えているようである。しかし、来年度から専門性のある専科教員がすべての小学校に配置されることは不可能であり、福井県のような指導体制が当分の間、必要とされる。

加えて、新年度から新学習指導要領が本格実施される今、小・中学校の連携強化が喫緊の課題である。小学校教員が中学校・高校の英語教員免許を持っている割合は全国 5.9% に対して、福井県では 9.2% と高い。

また、小・中学校間での人事異動が毎年異動者の 2 割程度行われる福井県では、中学校で英語を教えていた

教員が小学校で英語専科として外国語活動・外国語科を教えたり、または英語専科教員が中学校に移動して英語を教えたりすることもある。このような小中間の人事交流が系統立った指導につながっているのは言うまでもない。これは他県にはまねできないことである。

このような教育文化がすでに根付いていることは、福井県の英語教育の大きな強みである。

Ⅲ 終わりに

前述のように、福井県では研修制度やALTの活用を生かした支援が、質の高い英語教育を担ってきた。

英語教育における研修とALTの活用は他県でも行っている。しかし、一番の違いはそれらが学校現場で当たり前のように徹底され、実施されているということである。

豊富で多角的な支援の上に、教員の日々の努力によって福井県の教育が成り立っている。必然性のある言語活動の設定やALTの活用、伝える相手を意識させた活動の授業づくり、やり取りを重視した授業づくり、他にも福井県学力調査(SASA)の実施やその結果分析を活用した研修がある。さらに、県英語教育研究会による伝統ある組織の存在や若手自主研究事業の活用によって、教員同士の交流や情報共有の場ができ、人脈づくりやスキルアップなどを生み出している。まだまだ挙げるときりがない。福井の英語教育は、各県が見習う点が大いにあり、今後も注目されていくであろう。

《参考文献》

- 文部科学省 (2017) 『小学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説 外国語活動・外国語編』
- 文部科学省 (2017) 『中学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説 外国語編』
- 文部科学省 (2018) 『Let's Try! ①②』
- 文部科学省 (2018) 『We Can! ①②』
- 文部科学省 (2018) 平成 30 年度「英語教育実施状況調査」資料